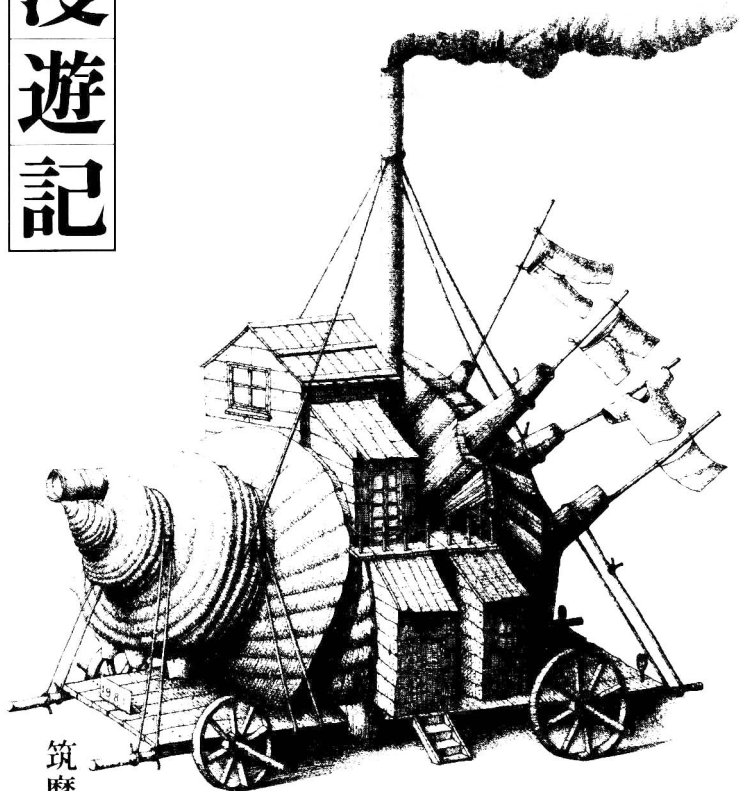


贗物漫遊記

種村季弘

種村季弘

贗物漫遊記



筑摩書房

質物漫遊記

©種村季弘
一九八三

一九八三年三月二十日 第一刷発行

著者 種村季弘

発行者 布川角左衛門

印刷 多田印刷

製本 積信堂

発行所 筑摩書房

東京神田小川町二ノ八
振替東京六一四一二三
電話東京五二一六五(営業)
二四一六二(編集)

1300A

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが小社読者係宛に
御送付下さい。送料小社負担にてお取替えます。

目次

	序章	肩書蒐集家の悲哀	7
1	あなたに似た人	13	
2	ガセネタくらべ	31	
3	私の娘	47	
4	帝大生登場	65	
5	影を売る男	83	
6	分身大活躍す	101	
7	キリストの墓いずこ	119	

8 悪人長生 137

9 小人国再訪 155

10 声色人生 173

11 贗物日記 191

12 池袋の女 209

終章 偽八卦の超能力 225

あとがき

装画
川原田徹

質物漫遊記

序章

肩書蒐集家の悲哀

「肩書をどうしましょうか」

と編集者に訊ねられることがある。こういう文章を書くときなのである。

「お任せします。そちらのご都合のよろしいように」

と私は答える。

そこで映画のことを書けば映画評論家、美術のことを書けば美術評論家、文学について書けば文芸評論家ということになる。

ただの評論家というのもある。その他、翻訳家、ドイツ文学者、作家、劇作家、詩を一度も書いたこともないのに詩人、美術史家、マニエリスム研究家、吸血鬼研究家、神秘学研究家、古文書研究家なんてのもあった。大学に勤めているときは××大学講師、助教授となった。これはまあ、わかる。

そういうば一度、勤めたおぼえない大学の教授にされていたこともある。もっともその話は

もう別に書いたことがあるのでここではくり返さない。

いずれにせよこれは全部、自分の方からこれこれこういう肩書にして下さい、と頼んだり申し出たりしたのではない。すべてオマカセの結果なのである。わけの分らない図像を突き出して、「何に見えますか」と質問する例のロールシャッハ・テストのように、十人十色の答が返ってくる。だから今後ともその種の質問があるたびに、私の肩書はふえる一方のはずなのだ。

なかにはどうしても自分から名乗ってもらいたい、と食い下る人もいる。待つて下さい、と私は言うのである。

「死ぬまで待つて下さい。死ぬ直前に自分から名乗ろうと思う肩書があるにはあります。もうちょっとの辛抱なんです。でもここだけの話、あなたにだけは教えときましょう。それは、肩書蒐集家、というのです」

悪びれずにそれを名乗るには時期尚早なのである。希望的観測にすぎないとはいえ、まさかまだ「死ぬ直前」ではないだろうと思っているからだ。それならば期限までにはまだいくらかコレクションがふえると見えていい。目下の所でも多少の蒐集はあるとはいえ、こんなものは田舎名士のハガキ大の名刺に列記された満艦飾程度のお粗末にすぎない。

私の念願は、辞書大とはいわぬまでも、せめて頁をバラバラとめくれる程度の一冊の手帖位にはコレクションをふやしておきたいのである。葬式のときに友人代表がそれを読んでくれる。落

語の寿限無式に長い長い長い肩書が読み上げられて、その次にやっと「故種村季弘君は……」と来るのだ。そのときのことを考えると、思わず私はうっとりとしてくる。いやしかし、とここで思うのだ、それでは友人代表に負担がかかるだろう。死んでまで人に迷惑をかけたくはない。そこで、泣いて馬謖を斬る思いで考え出したのが、右のすべてを総攬しておかつ一言にして要約しているところの、「肩書蒐集家」なのであった。詳細な内訳の方は別に小冊子にして配ろう。生きている間にもう一つ迷うのが称号である。日常の会話中、相手が呼び掛ける称号だ。「先生」といわれたりするが、いうまでもなくこれがおだやかではない。

作家の埴谷雄高さんが「先生」と呼ばれるのが大嫌いなのは、沢山の人がそのことを書いてるので有名である。埴谷さんのような人でさえ「先生」と呼ばれるのを拒否しているのだから、私ごときがこれを許容するのは烏滸がましいもいいところだ。

そう思って、何かの拍子に「先生」と呼ばれると、「よせやい、そんな柄かよ」と応じてきた。かなり潔癖にそうしてきた。

それが、あるときを境に寛容になったのである。「先生」と呼ばれても「ハイ」と答える。変節したのである。

数年前に浅草千束の飲み屋で一パイやっていた。五十年配の女将が「先生、お代り」と来たのに、例の「よせやい」で応じたのである。ところが、このたびは勝手が違った。

「お客さん、よくインテリっぽいのにそういう人がいるけどサ、こっちの身にもなって下さいよ。あんまり金離れのいい方じゃない人の名前をいちいちおぼえて、そのたんびに誰ソレさんなんて言えますか。ツケ上っちゃいけないよ。こっちはみるからに金がなさそうでちつとは頭がありそうなのは全部、先生、頭はないけど金がありそうなのは社長、ですまそうって算段してるんだからさあ。協力してよ、ネ」

フーム、なるほど。テキはかねがねそういう能率本位の眼でこちらを見ておったのか。よくよく考えてみれば、そういう自分だって他人さまの名前をいちいち記憶してはいない。殊に相手が女性の場合、肉体的に気をそえられる対象に関してはほぼ年齢に関係なく「姐ちゃん」、それ以外は「小母さん」と本能的に区別している。そういうわが差別感情に思い当るものがないではない。ついでながら「お嬢さん」みたいな人にはツキ合ってもらったことがないから、この方は思い悩むこともない。

そういうわけで、その日から宗旨を変えた。相手が客商売の女性に限って、「先生」と呼ばれても甘受せねばならぬと悟ったのである。むろん男の方は、学生でもない限り、先生と呼ばれないことの権利を行使していたい。しかし、たとえばトルコ嬢並みに酷使されている現今の編集者に、そんな無理難題をいつまでふっかけていられるか。

肩書の方は主として文章の精神的内容による。したがって、精神的に不安定かつ流動的な私は、

医師に病名を決定してもらうように、今後ともそのたびにあちらさまに肩書を決定してもらい、老婆や白痴となってバリ中のいたるところに神出鬼没する『ファントマ』の名探偵ジューヴのよう、カメレオンもかくやとばかりに変幻していたい。

マ、マならぬのは称号の方である。これは、判断の基準が精神の内容ではなくて、あくまでも財布の中身による。「先生」と呼ばれなくてはならぬ「社長」になるほかはなく、私は私なりに日夜前者から後者へ向っての変身にひたすら涙ぐましい努力もしているのだが、結果はどうもはかばかしくない。敵は千里眼のように私の財布の中身をズバリ透視して、「社長」というときの濃厚さとは打って変った薄情さで、「センチ」としか呼び掛けてくれないのである。

1

あなたに似た人

東京タワーにマダム・タッソー蠟人形館が公開されたのは昭和四十四年七月四日のことである。その頃私はタワーから歩いて五分程の愛宕山に住んでいたので、開館早々の陳列からよく観にいった。

切符売場の制服の女の子に千円札を出すとそれが人形だったり、血みどろの断末魔を見ているうちに横合いにふっと人の気配がしてふりむくと、これもしおたれたツイード服の、つまりは自分とそっくりの観客の人形だったりするのが面白くて当座は何度も足を運んだ。

チャーナルとヒトラーがいる。マリリン・モンローがいて、クレオパトラがいる。ドラキュラ伯爵が犬歯をによきによき突き出した口元から真紅の生血をたらーりたらとしたらせている。怪物の屍体の腹をたち割って、何やらあやしげな電動機械を埋め込んでいるのはヴィクター・フランケンシュタイン博士。

最後のコーナーにはこれらすべての人形の生みの親（ということになっている）マダム・タッ